

『日本国累年気象表』(中央气象台、昭和 4 年)

『日本国累年気候表』(農業技術協会、昭和 29 年)

気象情報は極めて信頼の出来る科学統計である。気圧、気温、降水量などの測定方法はかなり昔から確立されており、しかも定点観察の重要性も早くから認識され、実行されてきたので、最も古いものは 1876 年以後今日に至るまで、ほぼ同じ場所で同じ測定方法で観察された統計が利用できる。これは、物価統計等の経済統計ではほとんど不可能なことである。すなわち、人々の消費需要の内容は変化するし、商品の品質も変わり、また販売店も移動があり、さらに価格体系も多様であるなど、100 年前の価格を今日の価格と直接比較することはほぼ不可能であることを意味している。

気象統計は国家運営にとって最も基本的な情報であり、第三者機関が全国的な規模で情報集収することは少ない。旧植民地における気象統計は戦前(昭和 4 年度版)はもちろんのこと、戦後(昭和 29 年度版)にも掲載されている。逆に、昭和 29 年は沖縄返還以前であり、沖縄各地の統計は 1945 年度頃で中断しており、1973 年の復帰以後再び記録されている。

このような 100 年以上に亘る月次統計を利用すれば、地球温暖化現象の検証や都市化のもたらす影響を統計的に分析することが可能となる。

平成 13 年 10 月

一橋大学広報委員会